
家庭教師ヒットマンREBORN! 星と雪と月の守護者

TH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 星と雪と月の守護者

【Nコード】

N9565X

【作者名】

TH

【あらすじ】

継承式編からすぎて虹の呪い編終了の話です。小説初心者です。見てくれたらとても感謝です。感想とアドバイスを下さい！！

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

リボーンオリジナルストーリーです。小説の初心者なのでできればアドバイスをください。

オリジナルキャラクター紹介

設定 継承式終了後。

敵ファミリー

ゴッドファミリー

ボンゴレ壊滅を目論んでいるマフィア。ファミリー達にはそれぞれ『オリュンポスの12使徒』の名前をコードネームをしている。

登場人物

バスクード・イゴール

所属 ボンゴレ門外顧問

階級 ボンゴレ星の守護者

使用リング 星のボンゴレリング

使用匣 星ライオン

使用武器 ショットガン

ボンゴレ星の守護者で門外顧問に所属している少年。年齢は14才。誕生日4月12日。血液型O型。門外顧問に所属しているため家光やバジル達とは顔見知りしている。明るく前向きな性格である。イメルダ、ゼキラとは幼少のころからの知り合いで、3人のリーダー的存在である。初めて会ったクロームに一目惚れする。

ゼキラ・ロレンツイニ

所属 ボンゴレ門外顧問

階級 ボンゴレ雪の守護者

使用匣 雪白熊

使用リング 雪のボンゴレリング

使用武器 剣

ボンゴレ雪の守護者で匣兵器の発明者・『ジェペット・ロレンツイニ』の曾孫。ポーカーフェイスで雪みたいに冷たい眼をしている。幼少の頃、両親が殺し屋に目の前で殺された過去があり、それ以降、殺し屋を憎んでいる。ボンゴレに拾われ、その頃からバスクード達

と親しくなる。最初はツナ達を見下していたが徐々にツナ達を認め始める。うるさいのが嫌いなため、了平の声や獄寺とハルのケンカなどを聞くとすぐさま剣を出して脅して黙らせる。殺し屋と戦う時には必ず非情になる。しかしバスクード達にはその裏腹に優しい一面もある。バスクード達と仲が良いと言う事を否定をしないなどバスクード達に絶対的な信頼をしている。

イメルダ・フェンリール

所属 ボンゴレ門外顧問

階級 ボンゴレ月の守護者

使用リング 月のボンゴレリング

使用匣 月ウサギ

使用武器 剣

ボンゴレ月の守護者。前向きで明るい性格の少女。かなりオシャレ好きで、戦う前でもオシャレしたりする。日本に興味があり、3人の中で一番日本を行きたがっていた。『真の美しさ』をこだわっている。ボンゴレに手を出した者にはきつい態度になる。初めて会った雲雀に一目惚れする。好きな言葉は「美」。

小雪

所属 ボンゴレ門外顧問

階級 ボンゴレ雪、星、月の守護者補佐

使用リング 大空系リング

使用匣 大空コンドル

使用武器 ブーメラン

ボンゴレ雪、星、月の守護者補佐を務める少女。2年前に殺し屋に追われていた所をゼキラ達に助けられた。それ以来、バスクード、イメルダには兄弟的存在として見ている。ゼキラには異性に意識している。

オリジナルキャラクター紹介（後書き）

だいたいこんな感じです。感想お待ちしています。

標的1 転校生

標的1 転校生

ツナ「え？転校生が来るの？」

山本「ああ。話によるとな、イタリアから留学しに来たんだってよ」

ツナ（イタリアか？そう言えば獄寺君もイタリアから来たんだよね……）

獄寺「もしその転校生が10代目に生意気な態度取ったら10代目の右腕・この獄寺隼人がぶっ飛ばしてやるぜ！10代目安心してください！」

ツナ「い、いいよ獄寺君！そんなことしなくて！（相変わらず怖いよこの人）」

山本「俺はむしろ楽しみだぜ？カオルみてえに野球好きな奴だったら入部大歓迎だぜ！」

獄寺「お前はいつもそればかりじゃねえかこの野球バカ！」

3人が会話していると先生が教室に入ってきた。

先生「ハイみんな席に着いて」

生徒達は先生の言うとおりに席に着いた。

先生「えー、今日からこのクラスに新しい生徒が入ることになった。それじゃあ2人とも入りなさい。」

教室に入ってきたのは一人はちゃんちゃそうな少年。もう一人はその真逆で物静かな少年だった。

先生「今日からこのクラスの生徒になる、『バスケット・イゴール』君と『ゼキラ・ロレンツイニ』君だ。みんな仲良くな」

バスケット「今日からこのクラスに入ることになった、バスケット・イゴールだ！よろしくな！」

ゼキラ「ゼキラ・ロレンツイニ。よろしく」

バスケットは明るくあいさつし、ゼキラは静かにあいさつした。

先生「えーとそれでは今空いている席に座ってください。」

バスカード「ウィーッス！」

ゼキラ「…ハイ」

2人は先生に返事をした後、バスカードはツナの隣、ゼキラは山本の隣に座った。するとバスカードは座った直後にツナに声掛けた
バスカード「よろしくな！沢田！」

ツナ「あつ、うんよろしくーアレ？なんで俺の名字知ってるの？」

バスカード「そりゃあ知ってるさ。お前ってボンゴレ10代目・沢田綱吉だろ？」

バスカードの言葉を聞いたツナは驚いた。なぜなら今日来た転校生が自分の事を知っているからだ。

ツナ「君ってもしかしてー」

バスカード「おお。俺、ボンゴレの一員だ。放課後、お前の仲間連れて屋上でゆっくり話そうぜ」

標的 1 転校生（後書き）

投稿遅れるかもしれませんがアドバイスと感想を下さい。

標的2 新しい守護者（前書き）

今日は少し長いです

標的2 新しい守護者

放課後。ツナは獄寺と山本、了平を呼び、屋上で集まっていた。

獄寺「10代目もしかしてその転校生、敵ファミリーのスパイじゃないんですか!？」

ツナ「わからない…でも悪い人には見えなかったし……」

山本「まさか転校生がマフィアごっこの新しい仲間なんてな!アハハ!」

獄寺「だからごっこじゃねえんだよ!バカ!」

了平「いいではないか!タコ頭!その転校生をわがボグシング部に入部させようではないか!」

獄寺「テメエはすぐそれかよ!いい加減ほどほどにしろよ芝生頭!」
了平「なんだとタコ頭!やるのか!?!」

獄寺「上等だぜ!白黒つけてやるぜ!」

山本「まあまあ。落ち着けて」

ツナ「獄寺君落ち着いて!それにお兄さんも!」

バスクード「ハハハハ!ずいぶん賑やかだなお前ら!」

4人は上を見るとバスクードが屋上の入り口の上に立っていた。

ツナ「バスクード君!」

バスクード「バスクードでいいぜ。よっと」

バスクードは屋上の入り口の上からジャンプして下りた。

バスクード「それで、そいつらがお前の仲間かツナ?」

ツナ「あっ、うん」

獄寺「おいテメエ!10代目に馴れ馴れしく『ツナ』って呼ぶな!」

山本「まあいいじゃねえか獄寺。紹介するぜ。俺は—」

バスクード「山本武。ボンゴレ雨の守護者で完全無欠最強無敵の流派・『時雨創燕流』の9代目継承者。普段は野球をしていて、将来はプロ野球選手を目指している。剣技の才能も優れていて、現にヴ

アリアーのスクアール、10年後の世界では幻騎士を倒している。
そして実家は寿司屋。だろ？」

山本「お前すっげえな！超能力者か？」

バスクード「違えーよ。俺達の情報力さ。ま、10年後の事は『あの娘』から聞いたがな」

ツナ「あの娘って、ユニの事？」

バスクード「ああ。10年後の出来事は全部ユニから聞いている。白蘭の事とかさ。なあなあ、白蘭ってめっちゃ強かったんだろ？」

ツナ「う、うん」

バスクード「いいな、俺も白蘭と闘りたかったな」

？「無駄な戦いは止めるっていつも言ってるだろ？バスクード」

ツナ達は声が聞こえた場所へ振り向くと屋上の出入り口に転校生のゼキラがいた。そして後ろには2人の女子生徒がいた

バスクード「よ！ゼキラ、イメルダ、小雪！」

ツナ「え？もしかしてこの3人も？」

バスクード「ああ。俺の仲間の『イメルダ・フェンリール』と『小雪』だ。」

イメルダ「イメルダ・フェンリールよ。よろしくね、10代目♪」

小雪「小雪です。よろしくお願いします…」

バスクード「そして、俺達はお前の守護者でもあるんだぜ？」

ツナ、獄寺、山本、了平「」「」「守護者？」「」

バスクード「あれ？お前らあいつに聞いてなねえのか？」

ツナ「あいつ？」

ゼキラは後ろに向き、誰もいない所に声掛けた。

ゼキラ「出て来いリボーン。いるんだろ？」

ゼキラが声をかけた場所から忍者の格好して隠れ身の術をしていたリボーンが現れた。

リボーン「ちゃおっす。久しぶりだな。お前ら」

バスクード「おう。久しぶりだな！つか、なんだその格好？」

ゼキラ「貴様…まだ生きてたのか…」

獄寺「テメエ！リボーンさんに向かって！」

獄寺はダイナマイトを出すとダイナマイトの導火線が切れ、光る何かが獄寺の喉筋に付けた。ゼキラの右手には剣があった。

獄寺「なっ…！」

それを見たツナ達は驚いた。武器を出す仕草が全くしていなかったからだ。

ゼキラ「俺の前にうるさい音をだすな。もししたら、斬る。」

ゼキラの冷たい目と溢れ出てくる殺気にツナ達は動揺した。しかしバスクードは動揺せずいつもの態度でゼキラを止めた。

バスクード「ハイハイゼキラくん。落ち着きましようね」

ゼキラはバスクードを睨んでいたが素直に聞いたのか剣をしまった。ゼキラ「バスクード。オレは先に帰る。殺し屋と一緒に居たら反吐が出る」

バスクード「おう、じゃあな」

ゼキラは屋上に出ていき、小雪もゼキラの後を追った。

イメルダ「ごめんね。あいつ殺し屋がもの凄く嫌いな。視界に入ると消したくなっちゃうんだよ」

ツナ「そうなんだ…それでさっきも言ってたけど、守護者って？」

リボーン「こいつ等は、星、雪、月の守護者なんだ」

獄寺「星と月と雪ですか！？しかしリボーンさん！ボンゴレリングは天空、嵐、雨、雷、晴、霧、雲だけだったはずじゃ…！」

リボーン「ボンゴレ一世はかつて星、月、雪という3人の守護者がいたんだ。しかしあいつ等は一世の正義が気に入ってボンゴレに入ったからな。二世がボスになったら、すぐに辞めちまったんだ。」

バスクード「そう言うこと。俺達はそれまで9代目の守護者をしてたんだ。あの人、全然マフィアに見えないしね。」

イメルダ「ようするに私達はあんたみたいなやつ以外は従う気はないってね」

バスクード「ちなみに、星はオレ、月はイメルダ、雪はゼキラだ」

獄寺「あいつが！？」

山本「どうした獄寺？」

了平「不満でもあるのか？タコ頭」

獄寺「大アリだ！あいつ、さっきリボンさんに無礼な態度をしたんだぞ！あいつは信用出来ねえ！」

バスクード「まあまあ。あいつも内心はいい奴だから大丈夫だよ。

殺し屋とうるさいやつが嫌いなだけだよ。」

獄寺「いいや！あいつは信用出来ねえ！」

イメルダ「随分疑い深いんだねアンタ。そんなんじゃ、彼女できないよ？」

獄寺「んだとテメー！！」

今からダイナマイトを出そうとした獄寺をバスクードが止めた。

バスクード「まあまあ。これから俺達ファミリーになるんだから仲良く行こうぜ？」

山本「そうだぜ。仲良くしようぜ？」

ツナ「そ、そうだよ獄寺君。」

ツナの仲裁を聞いた獄寺は「10代目がそう仰るのですしたら」と言いながらダイナマイトをしまった。

バスクード「じゃあ、俺達はもう帰るぜ。明日もし出来たら他の守護者と会わせてくれよ。じゃあな」

ツナ「うん。じゃあね」

山本「じゃあな！」

3人は屋上の出入り口にへと向かっている途中にイメルダは獄寺にベーと舌を出した。

獄寺「あのクソ女！」

ツナ「ちょ！獄寺君！落ち着いて！」

獄寺はイメルダの挑発に腹を立て、爆発した。ツナと山本、了平はなんとか落ち着かせようとした。そんな所を校舎に離れている屋上から見ている集団がいた

「あれがボンゴレ10代目・沢田綱吉か…」

「なーんだ。ただのガキじゃん」

「でも油断しない方が良いぜ？現にあいつあのXANXASや白蘭、D・スピードを倒したらしいぜ？」

「なかなか面白そうじゃないか。沢田綱吉…お前の命は俺がいたでく」

標的3 雲の守護者

翌日ツナ達はバスカード達と並盛の案内をするため並盛商店街で待っていた。

山本「遅いなあいつ等」

獄寺「どうでもいいぜあんな奴ら」

山本「落ち着けよ獄寺。まだ怒ってんのか？」

リボーン「お、来たぞ」

ツナ達はリボーンが向いている所に向くとリボーンの言うとおりにバスカード達がこっちに向かっていた。

バスカード「ワリーワリー。イメルダがおしゃれして手遅れちゃったよ」

イメルダ「分かっているわね」バスカード。女は日頃の身だしなみが重要なものよ」

山本「あれ？ゼキラと小雪は？」

バスカード「ゼキラは行かないって言った。『うるさいやつと一緒にいるのはごめんだ』だって。小雪はゼキラと一緒に留守番。」

獄寺「あんのヤロー：10代目に連絡もせずに行かないなんて：何様のつもりだ！？」

ツナ「い、いいんだよ獄寺君！俺が無理に誘っちゃったから」

イメルダ「ところでさどこに案内するの？」

ツナ「え：とじゃあまず、商店街を案内するね」

ツナ達はバスカード達に並盛町を案内をした。その途中見覚えのある男と会った。学ランを肩に羽織り、その腕に『風紀』と書かれた腕章を付けている男だった。彼はボンゴレファミリー最強の雲の守護者で並盛中の風紀委員長・『雲雀恭弥』だった。

ツナ「ヒ、ヒバリさん！！」

山本「よ、ヒバリ」

獄寺「ヒバリ!!」

リボーン「ちゃおっす。ヒバリ」

ヒバリ「やあ赤ん坊。君たち、なにを群れてるんだい？」

ツナ「ヒ、ヒバリさん!これはえ…とその…」

雲雀の質問になんて答えようか迷うツナを先にバスクードが質問を答えた。

バスクード「俺達はツナ達にこの町を案内してもらってたんだよ。んなことよりもさ、アンタ、雲雀恭弥だよな？」

ヒバリ「だったら？」

バスクード「アンタの噂聞いてんだよ。めっちゃ強いだろ？」

ヒバリ「当たり前だよ。君、あの赤ん坊の知り合いみたいだけど、強いのかい？」

ヒバリは不敵な笑みでバスクードを見た。しかしバスクードは動揺せず普通の態度でヒバリに返事した。

バスクード「強いと思うぜ。俺はこう見えてもヒットマンや数々のファミリを倒したこともあるしな。」

ツナ（え…バスクードってそんなに強いのか？）

リボーン「ああ。強えーぞ。あいつは一回バジルと闘って、倒したからな。」

ツナ「そうなの!? って言うかりボーン! 人の心を読むな!」

ヒバリ「それじゃあ、相手してくれる？」

ヒバリはそう言うとは何処からかトンファアを出して構えた。

バスクード「ごめん。今日は無理だ。今度にしねえか? ああ、大丈夫。俺は逃げないから」

ヒバリは納得したのかトンファアをしまった。

ヒバリ「分かったよ。しかしもし約束を破ったら…分かってるよね？」

バスクード「わーてるって」

ヒバリ「フ、じゃあね」

ヒバリは背をむき商店街へ出た。

ツナ「凄い…あのヒバリさん相手に普通に接した……」

バスクード「あいつそんなに怖いのか？」

ツナ「怖いよ！だってあの人めちゃくちゃ強いんだよ！！」

バスクード「そうか…ますますワクワクしてきたぜ！」

ツナ&獄寺（戦闘マニアだ…）

イメルダ「あの人…超カッコ良くない！？あたしモロ好み！」

バスクード「なんだお前？惚れたのか？」

イメルダ「うん……ああ、日本に来て良かった…また会えるかな…」

山本「いつでも会えるぜ。ヒバリも同じ並中生だからな。」

イメルダ「ホント！？ヤッター！明日からあの人に猛アタックよ！

！」

バスクード「頑張れよ」

標的4 霧の守護者（前書き）

しばらく守護者たちとの顔合わせをするかもしれません。おそらく京子たちなどはあんまりでないかもしれませんが。すいません

標的4 霧の守護者

その後、並盛商店街に出たツナ達。しばらく歩いているとそこに黒曜中の制服を着た少女がいた。ツナ達には見覚えのある少女だ。ボンゴレの霧の守護者・『クローム髑髏』だった。

ツナ「あ、クローム。」

山本「よ！クローム」

クローム「ボス……」

バスクード（うわ！この娘、メツチャ可愛い！）

ツナ「何してるの？」

クローム「犬と千種に買い出し頼まれて…ボス、あの2人は？」

ツナ「ああ。この2人はねー」

イメルダ「初めまして。イメルダ・フェンリールよ。ツナ達の新しい仲間よ。あなたがクローム髑髏？」

イメルダの質問をクロームはコクツと頷いた。

イメルダ「へえ、あなたがねえ…噂とは随分女の子じゃん。仲良くしようね」

イメルダはクロームに握手しようとしたのか手を差し出したがクロームは少し戸惑った。

イメルダ「あれ？怖がらせちゃったかな？ごめんね」

ツナ（イメルダの態度が少し変わった…？もしかしてイメルダ…女の子の友達いなかったのかな…？）

バスクード「おいおい！イメルダ！お前だけずるいぞ！俺にも自己紹介させろよ！」

イメルダ「ハイハイ。」

バスクード「俺は、バスクード・イゴール！よろしくなクローム！」
バスクードは少し顔を赤くしながらクロームに自己紹介したが今のクロームは頭に『？』のマークの状態だった。

イメルダ「バスクード。少しは落ち着きなさいよ…」

山本「なんか急にテンションが上がったな」

獄寺「うっせー奴」

バスクード「俺、今日からボンゴレの守護者になるから、今後よろしくな！」

ツナ（なんか…さっきよりも明るくなったのは気のせいかな…？）

イメルダ（あちゃー、これは一目惚れだわ…）

こうしてバスクードはクロームに一目惚れましたとき

標的5 雷の守護者

ツナ「えーと、大体は回ってきたね。次はどこに行きたい?」

ツナの質問を聞いたバスクードとイメルダは少しだけ考え、すぐにツナ達に言った。

バスクード「お前ん家に行きたい。」

イメルダ「右に同じく。」

ツナ「え!?! オレン家!?!」

バスクード「うん。ツナの家」

イメルダ「他に何かあるのよ?」

ツナ「ああ、いや、そうじゃなくってどうして急に?」

バスクード「お前の家に雷の守護者がいるって家光さんから聞いたから。会ってみようかなって思ってた。」

ツナ「ランボに:でもあいつウザいよ?」

バスクード「ウザいのか?どれくらいに」

獄寺「殺して座布団にしたいほどだ。」

イメルダ「ど、ただけウザいのよ:」

獄寺の言葉を聞いたイメルダは少し引きずった。

山本「そうか?俺はそんな風には見えないけどな」

獄寺「テメエは天然だからわかんねえよ」

バスクード「まあとにかくそいつがウザくても顔を見せるのが礼儀だろ?ほら行こうぜ」

獄寺「てめえ!10代目が決めるのに勝手に決めんな!」

ツナ「いいんだよ獄寺君。俺も連れて行きたかったし。」

獄寺「じゅ、10代目がそう仰るなら:」

イメルダ「:バカバカしい」

イメルダは獄寺の態度に見て、小声で獄寺に愚痴を言ったが本人には聞こえてなかった。

バスクード「どんな奴なんだろうな。なあ年はいくつなんだ?」

ツナ「ああ今は6歳だよ」

バスカード「6歳！？年下って聞いたけど、いくらなんでも離れすぎだろ？」

イメルダ「6歳でよく10年後の世界に生き残れたわね…」

しばらく会話をしているとツナ達は沢田宅に着いた。

ツナ「着いたよ。ここがオレの家だよ。」

バスカード「ここがツナの家？」

イメルダ「普通ね」

ツナが玄関のドアを開けると大きな笑い声が響いた。

「ガハハハハハ！ランボさん登場だもんね！ツナ！おれっちと遊べ！」

ツナ「コラ！ランボ！大きな声を出すな！近所迷惑だろ！」

「ランボ！静かにする！」

いまツナに怒られているのがボンゴレ雷の守護者の『ランボ』である。元は中小マフフィア・『ボヴィーノファミリー』のヒットマンだがヴァリアーとのリング争奪戦で家光に雷の守護者に選ばれ、ボンゴレファミリーに所属することになったのだ。そして片言口調でランボに注意したのは香港からやってきたヒットマン・『イーピン』である。

バスカード「誰こいつ？」

獄寺「例のうぜえ雷の守護者だ」

ランボ「ほへ？お前ら誰？ランボさんの新しい子分？」

ツナ「ランボ！初対面の人に失礼だろ！ごめんね。こいついつもこうなんだ」

イメルダ「いいよ。気にしてないし。ところでこっちの子は？」

ツナ「こっちはイーピンっていうんだ。ランボと同じ年の子だよ。」

イーピン「イーピン、よろしく」

イーピンはお辞儀をした後、手を差し出した。おそらく握手だろうイメルダ「礼儀正しい子ね。私はイメルダ。よろしくね、イーピンちゃん」

バスクード「オレはバスクード。よろしく」

バスクードとイメルダも自己紹介をしイーピンに握手した。

ランボ「カラー！ランボさんを見視するな！おれっちは最強のヒットマンだぞー！」

バスクード「おー。それはこわいねー。」

「うるさいわよアホ牛ーあら？ツナ帰ってたの？」

玄関から女性の声が聞こえ、ツナは振り向いた。しかし獄寺は振り向くとどころが顔が青くなり全身から大量の汗が出てきた。彼女は獄寺の異母姉でありリボンの愛人・『ビアンキ』である。

ビアンキ「あら？ハヤト。来てたのね」
しかし

獄寺「ア、アネキ…ゴハ！」

ビアンキを見た獄寺は急に腹痛がなり気絶した。

バスクード「ご、獄寺！？」

山本「おい、大丈夫か？」

イメルダ「ていうか、アネキってアンタ毒サソリビアンキの弟なの！？」

ビアンキ「あら、またハヤトったら照れちゃって」

ツナ（相変わらず気づいてない…）

しばらくツナ達の大騒動は続いたとは別の話し。

標的6 シモンファミリー 前編

沢田宅での大騒動から翌日。ツナ達はバスカードとイメルダと一緒に登校していた。

ツナ「はあゝ：昨日はもうクタクタだったよ……」

山本「それにしてもゼキラの奴来ればよかったのにな。せつかくダチがたくさん出来たのにな」

バスカード「あいつは気難しいからな。仲間って認めた奴はそれだけゼキラが気に入った奴だってことだぜ」

イメルダ「最初は嫌な奴かと思ったけど案がいい奴だったしね」

山本「へえ。結構いい奴じゃん」

獄寺「あいつ：マジで10代目にお守りする気があんのか……」

バスカード「あるんじゃないかねえの？そうじゃなかったら、守護者になるもんか」

獄寺「だったらなんでリボンさんにあんな態度を取るんだよ！」

イメルダ「あいつには事情があるのよ。それに前も言ったでしょ？

あいつは殺し屋を憎んでるって。だからリボンも例外でもないのよ。後、ヴァリアーもね」

ツナ（ゼキラって人：どうしてそこまで憎んでるのにボンゴレに入っただろ……）

イメルダの言葉に少し疑問を感じたツナはしばらくゼキラの事を考えながら学校へ向かった。すると校門の前にヒバリがいた。

ヒバリ「君たち。また群れているね？」

ツナ「ひ、ヒバリさん!？」

獄寺「テメェ！また10代目にそのような態度を！」

バスカード「お前細かいな：そこだけは」

イメルダ「ヒバリさん！お早うございます！！風紀委員の仕事ですか!？」

ヒバリ「それ以外何があるの？」

イメルダ「そんな冷たく言わないでくださいよ♪」

バスクード（さっそくアタックか…イメルダファイト）

イメルダの猛アタックを見ている他の並中の生徒達はそんな事よりも普通にヒバリに話しかけていることで驚いていた。

男子生徒「あいつ、ヒバリさんと話してるぜ…」

女子生徒「怖くないのかな…？」

バスクード「なんだ？みんなジロジロみて？」

ツナ「ヒバリさんと話してるからだよ」

バスクード「あいつが話しかけるのがそんなに珍しいのか？」

ツナとバスクードが話していると後ろから女性の声が響いた。

「その女子生徒！校門の前で立ち話をするな！！」

ツナ「あ、『アーデルハイト』！」

声の主はボンゴレの兄弟ファミリー・『シモンファミリー』の水河の守護者・『鈴木アーデルハイト』だった。彼女は左手に鉄の扇子を持ち、もう片方には男性が引きずっていた。彼はシモンファミリーの砂漠の守護者・『加藤ジュリー』だ。

バスクード「なんだアンタ？それとその引きずっている奴は？」

山本「ジュリーの奴何したんだ？」

アーデルハイト「また女子生徒にナンパをしていたのだ」

ツナ（また…この人、もしかしてシャル並！？）

ジュリー「全くだいいじゃねえかよアーデルちゃんよう。ホント、嫉妬深い「黙れ！」グフォ！」

ジュリーのチャラけた発言を聞き、アーデルハイトは容赦なく鉄扇子でジュリーを殴った。

ツナ／獄寺（容赦ねえ…）

バスクードは2人の張り合いを見ておらず、アーデルハイトとジュリーが付けているリングを見ていた。それを見た瞬間バスクードの表情は珍しく険しい表情になった。ヒバリと会話をしていたイメルダは会話中にヒバリは応接室に行ったため、会話が終わっていた。イメルダもバスクードが険しい表情に気付いた。

イメルダ「どうしたのバスカード？」

バスカード「イメルダ：あの2人、シモンファミリーだ」

イメルダ「ええ！？どうして分かったの？」

バスカード「2人の指を見ろ。あれはシモンリングだ」

イメルダも2人の指を見てイメルダも驚いた。

イメルダ「うそ：あいつらが：どうするの？」

バスカード「今は様子見だ。もう襲ってこないって9代目が言っていたしな：」

イメルダはバスカードの言葉を少し戸惑ったが「わかった」と了承した。

すると

ゴッン！

突然空から野球ボールが落ちてきてツナの頭にヒットした。

ツナ「イッテー！」

獄寺「10代目！大丈夫ですか！？」

山本「お、カオル！」

山本はこっちに走って来る生徒に手を振った。こっちに来るのは山本と同じ野球部所属でシモンファミリーの湖の守護者・『水野薫』だった。

獄寺「てめえ！10代目になんて事を！」

薫「……ワリイ」

ツナ「あ、いいよ大丈夫だから」

山本「カオルお前何してたんだ？自主練してたのか？」

カオルは山本の質問を聞き、コクツと頷いた。

山本「そうか。じゃあ俺も入れて良いか？」

カオルはまたコクツと頷いた。

山本「ツナ。俺、カオルと自主練してくるから後でな」

ツナ「うん。わかった」

山本はカオルと一緒にグラウンドへむかった。それを見ていたバスカードは険しい表情で山本と薫を見ていた。

バスカード（まさか、あいつ等とこんな形にあるとはな…っ
てことは、ボスもいるのか？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9565x/>

家庭教師ヒットマンREBORN! 星と雪と月の守護者

2011年11月17日17時40分発行